



杏雨書屋(きょううしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。

杏雨書屋は移転のため2013年1～9月まで閉館されます。移転後は一般向け展示も予定しております。お楽しみに！

其ノ式 ほんぞうひん い せいよう 本草品彙精要 —大黃と甘草—

案内人◇小曾戸 洋
(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長)

杏雨書屋の蔵書の中核をなすのは本草書(古典薬物書)ですが、その逸品の一つに『本草品彙精要』という中国の本草書があります。

中国国家の公定薬物書を勅撰本草といい、唐代には『新修本草』が、宋代には『証類本草』が編纂されました。明代の本草書は『本草綱目』が有名ですが、これは李時珍の個人の著(私撰本草)で、勅撰本草ではありません。

『本草品彙精要』は明の第10代皇帝孝宗弘治帝の命のもと、太医院院判の劉文泰らによって弘治18(1505)年に完成をみた明清間唯一の勅撰本草です。ただ、明清時代にはついに出版に至らず、原本のほかに写本が数点作られたのみでした。杏雨書屋の蔵書は弘治勅撰の原本そのもので、明の宮廷職人の技術の粋を尽くしてなった全42巻36冊の豪華本です。絵図の精緻さ、文字の謹厳さは絶品で、本草学研究においてはもとより、美術品としても高い資料価値があります。

写真はタケダ漢方便秘薬を構成する大黃(巻13)と甘草(巻7)の該当部分。薬物学書である『神農本草経』では、大黃は下品(治療薬)に分類され、「瘀血・血閉・寒熱を下すを主る。癥瘕・積聚を破る。留飲・宿食・腸胃を蕩滌い、陳きを推して新しきを致し、水穀を通利し、中を調え、食を化し、五臓を和す」とあり、大黃の通下、

巻 13



巻 7



杏雨書屋蔵
『本草品彙精要』

新陳代謝促進作用が流暢な文章でつづられています。

一方、甘草は上品(養命薬:生命を養う目的の薬)に分類される生薬です。写真の赤字で書かれた文章が『神農本草経』から引用された原文で、「五臓六腑の寒熱邪気を主る。筋骨を堅くし、肌肉を長じ、力を倍す。金瘡、腫。毒を解す。久服すれば、身を軽くし、年を延ばす」とあります。

大黃の別名は「將軍」。生薬のなかでも邪気を攻める代表格であることから、こう名づけられました。一方、甘草の別名は「国老」。すなわち国を守る長老で、防備の代表格。攻めるだけでは戦いは万全ではありません。攻撃の大黃と防備の甘草のペアはシンプルにして究極の組み合わせといえるでしょう。

だいろかんぞうとう
大黃甘草湯は攻守が揃った
究極の漢方薬です。



小曾戸 洋(こそと ひろし)

1950年山口県下関で小曾戸薬局を営む小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書『小品方』の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解読により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。最近では宋版『孫真人玉函方(そんしんじんぎょくかんぼう)』を発見し話題に。主な著書『日本漢方典籍辞典』(大修館書店)、『中国医学古典と日本一書誌と伝承』(塙書房)、『漢方の歴史—中国・日本の伝統医学』(大修館書店あじあボックス)。